

4. 文学部・人文社会系研究科

I	文学部・人文社会系研究科の研究目的と特徴	4 - 2
II	「研究の水準」の分析・判定	4 - 3
	分析項目 I 研究活動の状況	4 - 3
	分析項目 II 研究成果の状況	4 - 10
III	「質の向上度」の分析	4 - 13

I 文学部・人文社会系研究科の研究目的と特徴

1. 本研究科の目的は「人間の思想、歴史、言語、社会に対する真の理解をめざして教育と研究を実践する」（「東京大学大学院人文社会系研究科規則」第1条の2）ことにある。本学の第2期中期目標に謳われた、総合大学として多様な分野での世界最高水準の研究を実施すると共に、研究の多様性、社会との連携、国際社会への貢献を目指すことと、本研究科の目的は一致する。本研究科の特徴は研究の多様性を尊重しつつ、（1）各分野における検証の継承・蓄積と体系化と（2）既存の枠にとられない先駆的な新分野の積極的な開拓にあり、研究の質の向上へと繋がるものである。本研究科の7専攻における研究目的は資料4-1の通りである。

<資料4-1 各専攻における研究がめざすところ>

基礎文化研究専攻	あらゆる文化的活動の基礎にある人間の思考・認識・感情、および言語・表現・文物・制度についての根源的な理解をめざして研究を行い、人類普遍の価値の実現に寄与する。
日本文化研究専攻	日本史学専門分野と日本語日文学専門分野が統合されている利点を生かし、世界的な視野に立って、日本社会の歴史とそこに生きる人々の言葉による思想や心情の表現の営みについて考究し、ひいては国際交流にも貢献する。
アジア文化研究専攻	アジア諸地域における思想・宗教、言語・文学、政治・経済・社会の多様な様相と複雑な歴史展開についての精深な理解を得るとともに、アジアに起源する諸文化の伝播・交流・変容の諸相を把握する。
欧米系文化研究専攻	古代から現代にいたる欧米系文化の生成と展開について、言語・文学・歴史の各分野で原典・資料の厳密な読解力を基に、多面的な文化活動や社会的発言を行い、人類の発展に寄与する。
社会文化研究専攻	人間と人間の相互作用のなかから生じる諸現象を研究対象とし、調査、実験、観察、資料分析等の方法に裏付けられた考究を通じて、現代における多様な人間と社会の問題の発見と解決に理論的・実証的に取り組み、広い視野と高い志をもって人類文化の発展に寄与する。
文化資源学研究専攻	文化資料体(文献資料、歴史資料、美術資料、考古学資料、文化調査資料、文化統計資料等)を学問研究と文化活動における有用な資源たらしめるために、関連諸機関との協力関係を構築しつつ、資料の発掘、考証と評価、整理と保存、公開と利用といった諸段階を総合し、全体として文化資源の形成・発達をリードする研究のを推進する。
韓国朝鮮文化研究専攻	過去から現在に至る韓国朝鮮文化および周辺地域との交流を、伝統と現在、あるいは通時的・共時的という観点から、歴史学・社会学・言語学・哲学・文化人類学という学問諸分野の方法論を複合的に用いて探求し、新たな韓国朝鮮学の学問体系を定立し、研究の発展に寄与する。

2. 新たな研究分野の開拓・創造を図ることを目的とした次世代人文学開発センターは、先端構想部門（文化交流、東アジア海域交流、日本語教育）と創成部門（人文情報学）、萌芽部門（演劇学、イスラーム地域研究、現代インド研究）の3部門から構成されている。2015年度には、先端構想部門に「集英社 高度教養寄付講座」を開設した。

〔想定する関係者とその期待〕

想定する関係者は、国内外の人文社会系諸学の学界および一般社会であり、前者は萌芽的・先端的研究と新たな学問領域の開拓を期待し、後者は、人文知をめぐる社会性に富む研究活動の促進と学術成果の社会的還元および文化的貢献を期待している。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

(1) 研究の継承的発展と萌芽的・先端的研究の活性化

本研究科は、巨視的な視野のもとに長期的かつ継続的な研究活動を以ってしてはじめて可能になる体系的研究の推進と継承的発展に意欲的かつ着実に取り組む一方で、先端的・文理融合的研究の活性化にも積極的に取り組み、学内外の横断的な共同研究の活性化を推進している(資料4-2)。

<資料4-2 横断的共同研究の例>

1. 「インド農村の長期変動に関する研究」(基盤研究(S)2009~2013年度)
2. 「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集(パウッダコーシャ)の構築」
(基盤研究(S)2011~2014年度)
3. 「国際連携による仏教学術知識基盤の形成 — 次世代人文学のモデル構築」
(基盤研究(A)2010~2013年度)
4. 「少子高齢化からみる階層構造の変容と格差生成メカニズムに関する総合的研究」
(特別推進研究 2013~2017年度)
5. 「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」
(基盤研究(A)2011~2014年度)

上記例は、それぞれの専門領域を牽引する本研究科教員が研究代表者となり、学内外の研究者と連携して、新たな研究領域の拠点作りの基礎に通じる活発な研究プロジェクトである。上記5は、医学や医療等の他分野の専門家との共同研究によって推進され、医療の現場と生命倫理の接合を学術的に構築しようとする先駆的な研究である。特に、保健・医療の現場との密接な連携は、人文知の社会貢献という点からも重要である。

次世代人文学開発センターの創成部門である人文情報学拠点における研究は、アジアに伝承された仏教の壮大な知識体系である大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、文字資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本研究は文理融合型の新たな研究として注目されている。

(2) 社会的貢献を目指す研究活動の活性化

人文知を広く社会に普及・啓蒙する重要な役割を自覚し、公開講座や講演会、シンポジウムを積極的に行っている。例えば、文学部公開講座は2011年度から毎年開催され、2015年度で6回目を迎える。2015年度には、「古代ギリシャ教に改宗することはできるか?」(西洋古典学専門分野の葛西康德氏)と題して講演があり、約200名が出席者した。

本研究科の附属北海文化研究常呂実習施設が所在する北海道常呂町において、2000年以来地域社会との連携のもとに継続してきた「常呂公開講座」は、2015年度に19回を迎え、特に2015年度は北見市合併10周年記念行事の一部として本公開講座が位置づけられ、高校生や一般住民を対象に多くの参加者を得た。このように、地域文化の発展に寄与すべく、地域社会との連携を継続してきた。

2011年度に開設された「死生学・応用倫理センター」では、医療・介護従事者のための死生学セミナーや、臨床倫理セミナーを開講して、医療現場との連携を強めて「死生学」の新展開を試みた。2012年度から夏と秋に開催されているセミナーはいずれも100名を超える参加者があった(別添資料4-1)。

(3) 国際学術交流の拡大

グローバル化に伴い多文化の共存・共生が緊急課題となっている現代にあつて、人文社会系諸学の重要性は一層増している。それは、人としての基盤を形成する基礎体力ともなりえるものであり、その効果が見えにくくまた即時的でないことが多いために短期的には過小評価される傾向にある。だからこそ、日本の人文社会系諸学を牽引する立場にある本研究科が果たす役割は大きい。

本研究科は、積極的に国際的学術交流を行ってきた(資料4-3)。例えば、2010年ノーベル文学賞を受賞したマリオ・バルガス＝リョサ氏を招き、2011年度に東京大学名誉博士号を贈呈するにあたり本研究科が尽力した。2015年度には、2008年ノーベル文学賞を受賞したフランスの作家ル・クレジオ氏を迎えて、講演会「青春を書く、老年を書く」を開催した。ノーベル賞受賞者の生の声を聞くことのできる貴重な機会は、学生、若手研究者にとっても大きな刺激となった。

<資料4-3 国際交流協定による研究者の派遣と受入れ>

国名等	大 学 名		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	総計
インド	デリー大学	受入	0	0	0	0	1	0	1
		派遣	0	0	0	0	2	0	2
中国	山東大学文史哲研究院・韓国研究中心	受入	0	0	5	0	0	3	8
		派遣	0	0	0	0	0	1	1
中国(台湾)	香港中文大学文学院	受入	3	3	0	0	0	0	6
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
韓国	ソウル大学校	受入	0	0	0	0	0	1	1
		派遣	0	0	1	0	0	1	2
	高麗大学校	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	1	1
	釜山大学校人文大学	受入	0	0	0	1	1	0	2
		派遣	0	1	0	0	0	1	2
台湾	中央研究院人文社会科学 研究センター地理情報科 学研究センター (2013.10 新規締結)	受入				0	3	4	7
		派遣				7	1	5	13
イラン	テヘラン大学	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	2	2	0	0	0	0	4
イギリス	セインズベリー 日本藝術研究所 (2015.1 新規締結)	受入					2	0	2
		派遣					0	2	2
イタリア	ローマ大学「ラ・サピエンツァ」	受入	1	0	0	1	2	0	4
		派遣	0	0	0	1	0	0	1
	パドヴァ大学	受入	0	0	0	0	0	1	1
		派遣	1	1	1	0	1	1	5
フィレンツェ大学	受入	1	1	1	1	1	1	6	
	派遣	0	0	0	0	0	0	0	
スイス	ジュネーヴ大学	受入	0	0	0	0	1	1	2
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
セルビア	ベオグラード大学 文学部、哲学部	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	3	0	3

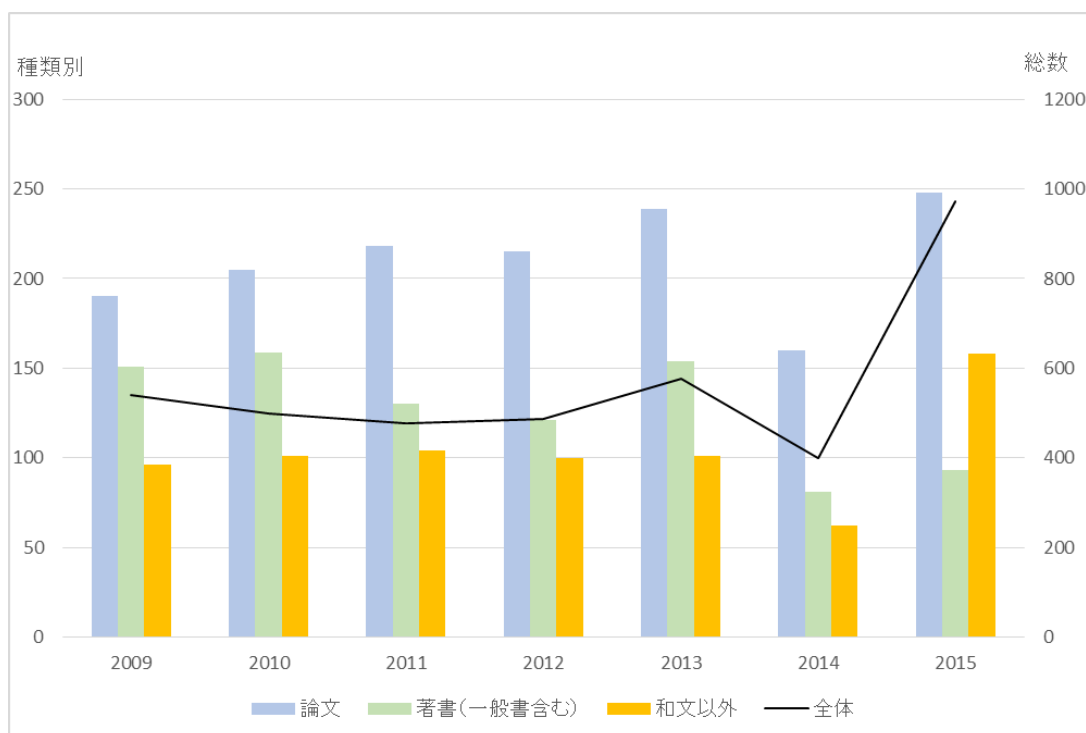
東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目 I

国名等	大学名		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	総計
ドイツ	ベルリン自由大学 歴史文化学部、大学院東アジア研究科、シュレーゲル大学院 文学研究科 (2013.2 新規締結)	受入			0	0	0	0	0
		派遣			1	1	1	0	3
	ポツダム・ルール大学	受入	0	2	0	1	0	0	3
		派遣	0	0	0	0	1	0	1
フランス	エコール・ノルマル・スーペリ ユール	受入	0	0	0	0	1	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
	エコール・ノルマル・スーペリ ユール/文学・人文科学リヨン 校	受入	0	0	0	0	1	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	1	1
ポーランド	ワルシャワ大学	受入	1	0	1	1	3	3	9
		派遣	0	1	0	0	1	0	2
ロシア	ロモノーソフ記念モスクワ国立 大学	受入	0	0	0	0	2	0	2
		派遣	1	2	0	0	2	0	5

(4) 論文著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

本研究科の教員は、1人当たり年間3～4件程度の著書や論文など多様な形態で研究成果を発表している。2015年度における全業績数は972と大きく上昇し、2009年度の560と比べて積極的な成果発表が明らかである（資料4-4および4-5-1～4-5-6）。2009年度と比べて論文数は190から248へと上昇した。また、予稿・会議録での大きな上昇は、積極的に学会に参加するのみならずみずから研究会を組織していることを反映している。ただ、ここでの比較に際しては、2015年度以前は学会参加等に伴う予稿・会議録とマスコミ関連が著しく過小申告されていた点は留意を要する。日本語以外の業績も増えており、2009年度には96であったものが2015年度には158へととなった。発表媒体も学術論文や著書のみならず、広く社会に向けて一般書や解説書はもちろんのこと、新聞・雑誌への寄稿などマスコミを通じた発言が多いのは本研究科の特徴ともいえる。

<資料4-4 教員による公表研究業績の推移>



東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目 I

<資料 4-5-1 専攻別公表研究業績数 (2010 年度) >

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	55	10	5	1	8	6	24	20	1	2	0	132	29	35
日本文化研究専攻	19	1	1	0	0	1	3	16	0	0	2	43	2	17
アジア文化研究専攻	33	3	2	0	7	7	1	14	8	3	0	78	20	23
欧米系文化研究専攻	63	1	17	1	0	8	20	23	14	0	4	151	36	35
社会文化研究専攻	15	1	1	1	0	0	3	13	0	5	0	39	9	13
文化資源学研究専攻	10	1	1	0	0	2	0	3	1	1	0	19	3	8
韓国朝鮮文化研究専攻	4	0	2	0	0	0	0	1	3	0	0	10	1	7
附属施設	6	1	0	0	0	0	15	3	0	0	3	28	1	5
計	205	18	29	3	15	24	66	93	27	11	9	500	101	143

<資料 4-5-2 専攻別公表研究業績数 (2011 年度) >

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	74	21	3	1	3	4	16	20	0	1	0	143	32	36
日本文化研究専攻	21	0	3	0	0	3	2	11	0	0	1	41	2	18
アジア文化研究専攻	34	9	4	0	5	2	1	16	3	1	0	75	25	23
欧米系文化研究専攻	39	0	16	7	0	12	14	17	6	0	0	111	27	38
社会文化研究専攻	23	0	3	0	0	1	2	10	2	1	0	42	12	12
文化資源学研究専攻	5	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	11	0	8
韓国朝鮮文化研究専攻	8	0	0	0	1	1	0	2	2	0	0	14	3	7
附属施設	14	2	3	0	0	0	14	3	0	2	2	40	3	4
計	218	32	32	8	9	25	49	81	13	7	3	477	104	146

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目 I

<資料 4-5-3 専攻別公表研究業績数 (2012 年度) >

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	59	6	10	2	2	4	18	12	8	1	0	122	26	35
日本文化研究専攻	26	3	9	2	1	5	0	18	1	0	1	66	1	17
アジア文化研究専攻	31	3	7	4	6	0	0	11	7	2	0	71	20	24
欧米系文化研究専攻	50	1	17	2	4	18	9	24	3	0	1	129	34	37
社会文化研究専攻	27	0	0	0	0	1	0	17	1	1	0	47	15	13
文化資源学研究専攻	5	0	1	0	0	0	0	3	0	1	0	10	4	7
韓国朝鮮文化研究専攻	3	0	1	2	1	0	0	3	0	0	0	10	0	6
附属施設	14	0	2	0	5	0	1	5	0	1	3	31	0	5
計	215	13	47	12	19	28	28	93	20	6	5	486	100	144

<資料 4-5-4 専攻別公表研究業績数 (2013 年度) >

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	66	22	14	3	2	9	19	23	3	1	0	162	39	34
日本文化研究専攻	28	4	3	1	0	12	8	17	0	1	1	75	0	17
アジア文化研究専攻	37	2	7	2	6	1	1	14	3	2	0	75	16	23
欧米系文化研究専攻	50	2	23	3	3	12	16	33	15	1	0	158	25	35
社会文化研究専攻	16	0	8	0	0	0	1	7	1	1	0	34	6	12
文化資源学研究専攻	3	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	5	2	6
韓国朝鮮文化研究専攻	8	0	1	0	1	1	0	5	0	0	0	16	4	6
附属施設	31	4	0	0	2	0	1	7	0	1	5	51	9	6
計	239	34	56	9	14	35	47	107	22	7	6	576	101	139

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目 I

<資料4-5-5 専攻別公表研究業績数(2014年度)>

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	47	21	8	0	3	10	17	8	6	1	0	121	18	32
日本文化研究専攻	16	0	2	0	0	3	5	5	1	0	1	33	1	17
アジア文化研究専攻	30	2	8	0	2	0	1	5	10	0	0	58	19	20
欧米系文化研究専攻	31	4	33	4	1	6	7	14	16	0	3	119	10	36
社会文化研究専攻	19	0	1	0	0	1	0	5	0	0	0	26	7	12
文化資源学研究専攻	0	3	0	0	0	0	0	3	0	0	0	6	3	5
韓国朝鮮文化研究専攻	4	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	8	2	6
附属施設	13	2	0	0	2	2	5	2	0	2	1	29	2	8
計	160	32	52	4	8	22	35	46	33	3	5	400	62	136

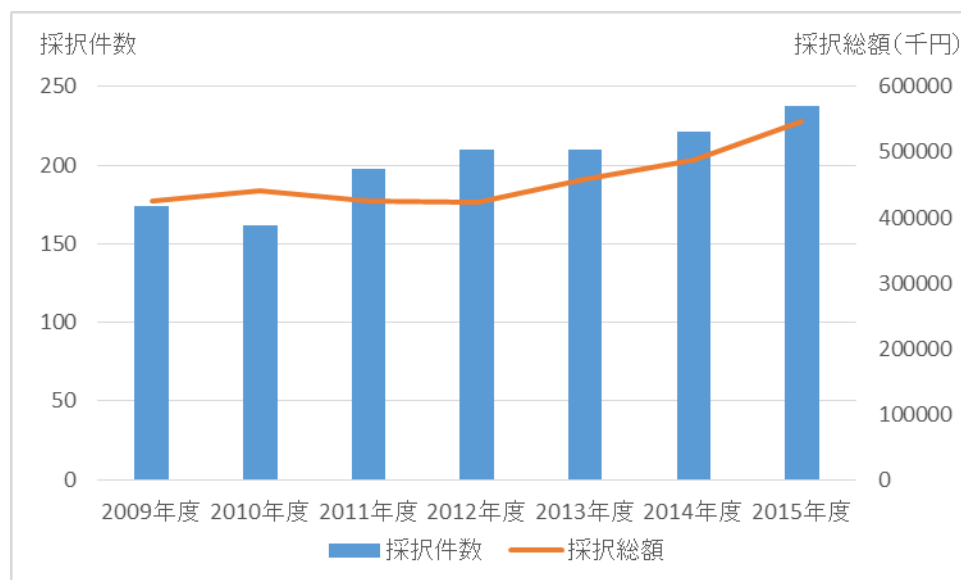
<資料4-5-6 専攻別公表研究業績数(2015年度)>

専攻	論文	予稿・会議録	書評	総説・総合報告	監修	解説	一般書	著書	マスコミ	研究報告書	史料	合計	内和文以外	教員数
基礎文化研究専攻	91	68	15	3	6	23	4	13	22	1	1	247	67	32
日本文化研究専攻	23	16	12	4	1	6	3	10	20	3	3	101	6	17
アジア文化研究専攻	32	18	5	2	0	11	3	10	15	1	0	97	19	21
欧米系文化研究専攻	23	17	35	6	4	25	9	20	57	1	0	197	15	34
社会文化研究専攻	33	63	5	7	0	1	0	6	7	4	0	126	28	12
文化資源学研究専攻	5	4	1	0	0	6	0	1	18	0	0	35	3	4
韓国朝鮮文化研究専攻	11	3	2	1	3	2	0	4	0	0	0	26	5	5
附属施設	30	42	1	2	10	8	4	6	36	4	0	143	15	9
計	248	231	76	25	24	82	23	70	175	14	4	972	158	134

(5) 研究資金の獲得状況

科学研究費助成事業(科研費)の採択件数は2009年度の174件から2015年度には238件と大きく上昇しており、その総額は2009年度の425,696千円から2015年度には546,530千円と増加した(資料4-6)。2010年度から2015年度の総採択件数は1,239件(総額2,782,471千円)であった(別添資料4-2)。教員1人あたりの平均獲得資金は、2009年度282万円から2015年度には471万円へと大きく増大した。

<資料4-6 科学研究費助成事業採択件数と採択総額の推移>



(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

萌芽的・先端的の研究は第1期に比べ活性化している。新たな研究の展開を試みる次世代人文開発センターでは、人文情報学拠点として世界最先端のデジタル知識基盤モデルの構築に向けた研究が進められ、2010年度より、人間文化研究機構「現代インド地域研究」推進事業が始まり、6つの大学と連携して、現代インドに関するネットワーク型の共同研究が展開されている。国際学术交流も盛んで、2名のノーベル賞受賞文学者マリオ・バルガス＝リョサ氏とル・クレジオ氏を招いての講演会を開催した。

研究業績数は、2009年度に比べ2015年度は540から972と大きく上昇した。比較にあたっては、2015年度以前まで過小申告されていたカテゴリーがあるので注意は必要である。その点を考慮しても、論文数が190から248へ、予稿・会議録にいたっては231と大きく上昇した。その背景には積極的な会議参加のみならず研究会を積極的に組織してきたことが反映されている。また、解説書やマスコミへの寄稿もそれぞれ、40から82、72から175へと上昇し、広く一般社会に高度な専門知を還元することで社会貢献していることが確認された。

研究資金面では科研費について、2009年度425,696千円から2015年度には546,530千円へと大きく上昇し、採択件数も174件から238件へと増え、競争的資金の獲得に積極的であったことは高く評価できる。

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

該当しない。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

(1) 学術的成果の状況

本研究科において人文知の体系化と継承的発展を目指す研究活動の成果は、研究業績説明書の諸例がその一端を示すように、国内外の権威ある学術誌や新聞紙上および海外の学界において高い評価を受けている。

その例は資料4-7に示すとおりである。no. 1と2は、学術的評価はもちろんのこと、社会的にも広く一般読者から高い評価を得た例である。また、欧文論文を通して積極的な研究活動が進められ、高い評価を得ているものも少なくない。それは、no. 3から8に示すとおりである。そこでは、人文学のみならず、理系学術雑誌での掲載があり、本研究科が文理融合の専門領域としてすでに蓄積があることを示す良い例である。また、no. 9は、学術成果を社会還元することで知的公共化を試みる点で重要である。

<資料4-7 学術的成果の例>

no.	書籍・論文(著者)	研究業績リスト 対応番号	成果内容
1	『マルタの鷹』講義(諏訪部浩一著)	業績番号11	2013年の第66回日本推理作家協会賞(評論その他部門)を受賞した著作であり、本書を含む業績により、著者は2014年度の第11回日本学術振興会賞を与えられた。
2	『日本中世境界史論』(村井章介著)	業績番号16	2014年度の一般財団法人角川文化振興財団の第36回角川源義賞(歴史研究部門)を受賞した。
3	“La tenzone del “duol d’amore”. La linea Notaio - Dante da Maiano - Boccaccio”(Ura, Kazuaki)	業績番号12	国際的な編集陣により運営されるイタリア中世文学の研究分野で定評のある <i>Medioevo letterario d’Italia</i> (2010年)の巻頭に掲載された。
4	“Frederick II’s Crusade: An Example of Christian-Muslim Diplomacy”(Takayama, Hiroshi)	業績番号17	<i>Mediterranea Historical Review</i> 掲載論文のうちMost Frequently Read Articles 8位にランクされている。
5	“The Reproduction of Engi and Memorial Offerings: Multiple Generations of the Ashikaga Shoguns and The Yūzū nenbutsu engi emaki”(Takagishi, Akira)	業績番号6 (2)	国際的な宗教学ジャーナル <i>Japanese Journal of Religious Studies</i> (2015)に掲載された。
6	“Pupillary light reflex to light inside the natural blind spot”(Kentaro Miyamoto & Ikuya Murakami)	業績番号21	インパクトファクター=5.578(<i>Journal Citation Reports 2014 調べ</i>)の国際オープンアクセス誌 <i>Scientific Reports</i> に掲載された。
7	“Gettier across cultures”(Machery, E., Stich, S., Rose, D., Chatterjee, A., Karasawa, K., Struchiner, N., Sirker, S., Usui, N., & Hashimoto, T.)	業績番号20	英文の一般哲学雑誌 <i>General Philosophy</i> で2位にランクされている <i>Nous</i> に掲載された。
8	“Neural Substrates Related to Motor Memory with Multiple Timescales in Sensorimotor Adaptation”(Kim S., Ogawa K., Lv J., Schweighofer N., and Imamizu H.)	業績番号22	トムソン・ロイター社が公表する評価指標(インパクトファクター)で9.3という高い値を誇り、国際的な影響力を持つ <i>PLoS Biology</i> 誌に掲載された。
9	SAT大蔵経データベースSAT Daizokyo Text Database(下田正弘他)	業績番号4	人文社会学分野における産官学共同を実現するとともに、人文社会学独自の学術成果の社会還元と次世代における知識公共化の方法を示している。

東京大学文学部・人文社会系研究科 分析項目Ⅱ

研究業績リストに挙げたものは、本研究科における多数の優れた業績の一部に過ぎず、学術、社会、文化など多方面から受賞した業績が数多くある。日本学士院賞や芸術選奨文部科学大臣賞、日本学術振興会賞、サントリー学芸賞をはじめ、国内外の権威ある受賞の件数は過去6年間で40件に及ぶ（資料4-8）。

<資料4-8 各賞受賞一覧>

受賞者	賞の名称	受賞年月日
阿部 公彦	サントリー学芸賞	2013.12.10
安藤 宏	やまなし文学賞 研究・評論部門	2013.3
安藤 宏	第35回角川源義賞 研究評論部門	2013.12.5
横澤 一彦	日本基礎心理学会優秀論文賞	2012.11.4
下田 正弘	仏教功労賞・最高賞	2011.4.22
下田 正弘	毎日出版文化賞	2014.11.28
加藤 有子	第四回表象文化論学会賞	2013.6.29
加藤 隆宏	平成25年度日本印度学仏教学会賞	2014.8.30
会田 薫子	2012年度日本医学哲学・倫理学会賞	2012
会田 薫子	2012年度三井住友海上福祉財団賞	2012
高岸 輝	日本学術振興会賞	2011.3.3
佐藤 信	第1回住田古瓦・考古学研究奨励賞	2013.3
柴田 元幸	日本翻訳文化賞	2010.10.26
柴野 京子	第4回日本マス・コミュニケーション学会優秀論文賞	2010.7
柴野 京子	第31回日本出版学会奨励賞	2010.4.24
小林 正人	第31回新村出賞	2012.11.23
松浦 純	恩賜賞	2013.6.17
松浦 純	日本学士院賞	2013.6.17
Keppler Tasaki	Einstein Visiting Fellowship	2015.1.1
新美 亮輔	日本基礎心理学会優秀発表賞	2012.2
新美 亮輔	第3回錯視コンテスト入賞	2011.12.3
諏訪部 浩一	日本推理作家協会賞	2013.5.31
諏訪部 浩一	日本学術振興会賞	2015.2.24
西村 明	南日本出版文化賞受賞	2012.6
斉藤 明	第21回中村元東方学術賞	2012
斉藤 明	中村元東方学術賞	2011.10.10
斉藤 明	第3回仏教思想学術賞	2014.7.12
早乙女 雅博	日本建築学会賞	2010.5.31
池田 謙一	平成22年度日本社会心理学会奨励論文賞	2010.9.15
池田 謙一	平成23年度日本社会心理学会奨励論文賞	2011.9.17
中村 雄祐	国際開発学会2010年度学会賞(奨励賞)	2010.12.4
塚本 昌則	第48回日本翻訳文化賞	2011.10.28
渡辺 裕	紫綬褒章	2013.5
渡辺 裕	芸術選奨文部科学大臣賞(評論等部門)	2011.3.17
唐澤 かおり	第15回日本社会心理学会奨励論文賞	2013.11.2
唐澤 かおり	日本グループダイナミクス学会2013年度優秀論文賞	2013.7.14
唐澤 かおり	人間環境学研究会第3回優秀論文賞	2014.6
村本 由紀子	日本社会心理学会賞(奨励論文賞)	2015.10.31
藤崎 衛	地中海学会ヘレンド賞	2014.6.14
白波瀬 佐和子	生協総研賞	2011.12.3
品田 瑞穂	Misumi Award	2013.8
野崎 歆	読売文学賞(研究・翻訳賞)	2011.2.21
野谷 文昭	会田由翻訳賞	2010.7.24

(2) 研究成果の社会への還元と活用

研究科の教員は2010年度以降、200冊を超える一般書（資料4-4）を刊行しており、このことは、研究の成果を広く社会に還元し、人類の文化と社会の継承的発展に資する知的・精神的基盤の構築と確保に努める本研究科の研究活動の重要な成果として高く評価できる。例えば、資料4-9に示すとおり、学術的意義も兼ね備えながら、その成果を広く社会に還元し、高い評価を得ている。

<資料4-9 学術的成果の社会還元例>

no.	書籍・論文(著者)	研究業績リスト 対応番号	成果内容
1	『純粹理性批判』(2012)、『実践理性批判』(2013)、『判断力批判』(2015) (熊野純彦(倫理学)訳)	業績番号1	近代哲学における重要なテキスト群について、カントによる批判書のすべてを個人で全訳したはじめての書として高い評価を得た。
2	『チェーホフ七分の絶望と三分の希望』(沼野充義(現代文芸)著)	業績番号13	多くの文芸読者にも親しみやすいスタイルでありながら、貴重な資料を含む欧語文献を駆使した学術書でもある。
3	『文学を凝視する』(阿部公彦(英米文学)著)	業績番号10	包括的に文化全体を見渡す視点をもつ作品として高い評価を得、2013年度のサントリー文芸賞を受賞した。
4	『「マルタの鷹」講義』(諏訪部浩(英米文学)一著)	業績番号11	2013年の第66回日本推理作家協会賞を受賞し、その成果が広く社会において評価された。
5	『近代小説の表現機構』(安藤宏(国文学)著)	業績番号9	角川賞源義賞を受賞し、読売新聞書評(2012年5月13日)、東京新聞 大波小波欄(2012年4月27日)、山梨日日新聞(2013年3月7日)に「人と作品」が特集されるなどの社会的反響もあった。
6	<i>Texts and Grammar of Malto</i> (Masato Kobayashi(言語学)著)	業績番号14	新村出記念財団から平成24年に第31回新村出賞を受けた。

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

本研究科における業績の特徴の一つは、高度に専門化した領域でありながら、一般読者にも読みやすいスタイルを同居させるような、学術的意義と社会・文化的意義の融合にある。世界の中の日本文学という視点を貫き、外国文学研究と日本文学批評を融合させた『チェーホフ七分の絶望と三分の希望』(業績番号13)や近代小説研究を広く社会に開示したと評された『近代小説の表現機構』(業績番号9)、凝視に関する文学的研究として高く評価された『文学を凝視する』(業績番号10)、そしてアメリカのハードボイルド小説の研究として日本推理作家協会賞を受賞した『「マルタの鷹」講義』(業績番号11)等は、この良い例である。また、*Scientific Reports* (業績番号21)や*PLoS Biology* (業績番号22(1))のように学術分野のトップジャーナルに掲載された研究業績もある。これはまさに、人文社会系研究が新たな人文知の体系化、文理融合分野の開拓といった挑戦を確実に進めていることを裏付けるものである。

また、限定的な専門知に留まることなく、積極的に一般社会に広く研究成果を還元していることは、解説書が2009年度40から2015年度82へ、マスコミが72から175へと増加したことからも伺うことができる。これはまさに、専門分野への学術的貢献と一般社会への研究成果の還元がいかに積極的になされてきたかを示すものである。

多言語による研究成果の発表も積極的に実施されていて、英語のみならずフランス語、ロシア語、イタリア語といった日本語以外の論文数は2009年度96から2015年度158へと増加した。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

第2期における研究活動は、これまでの専門分野の伝承・維持・発展に加えて、文理融合型、社会貢献型の新たな分野の開拓が積極的に行われてきた。それは例えば、2013年度に次世代人文学開発センターに創設された「人文情報学拠点」や2010年度から展開されている現代インド研究、そして死生学・応用倫理センターにおける医療・介護従事者といった現場と死生学という新たな研究分野の展開に認められる。

また、本研究科がもう一つの軸足をおいてきた人文社会系研究分野の継承・蓄積と体系化に対しても、例えば、2014年度に日本文化研究専攻に対して実施された外部評価の結果において高い評価を得た（資料4-10）。

<資料4-10 日本文化研究専攻 外部評価報告書「総論」(抜粋)>

「日本文化研究専攻の各研究室は、大学の研究室として日本でもっとも歴史が長いのみならず、創設以来常にそれぞれの分野における日本の中心的な研究教育機関であり、主導的役割をになってきた。……各研究室の教員の研究活動の質はきわめて高くまた活発であり、学会運営も含めてそれぞれの分野における日本を代表する研究室にふさわしい活動状況であると評価される」(p.134)

科研費の採択件数は2015年度には238件と2009年度の174件から大きく上昇しており、その総額も2015年度は5億を越えて2009年度より大きく伸びた（資料4-6；P4-9）。教員1人あたりの平均獲得資金は、2009年度282万円から2015年度471万円へと大きく上昇し、研究資金を獲得して、伝統的のみならず新たな学問領域の開拓に向けて積極的に研究を展開している。公表研究業績も2015年度は900を超え、2009年度の540より大きく増加した。

研究成果としては、2015年度は特に、学会報告、研究会開催等への積極的な取り組みが明らかで、それは「予稿・会議録」の大幅な上昇（2015年度で231）として確認できる。ただ、2014年度以前において同カテゴリーへの申告が過小であったことはここでの上昇を慎重に評価しなければならない。それでも、学術論文が2009年度190であったのが2015年度には248となり、日本語以外の業績は2009年度の96であったものが2015年度には158となった。さらに、一般社会に向けての貢献も高く、解説書（2009年度40から2015年度82へ）や新聞・雑誌への寄稿等のマスコミ関連が2009年度72から2015年度には175へと、研究成果を積極的に社会還元している。

このように、本研究科は、人文社会系諸学の伝統としての研究にとどまることなく、時代の要請を速やかに感じ取り、新たな学問領域の創設に向けた新機軸を積極的に取り入れた研究活動を行っている。その意味から、本研究科の研究活動の質は著しく向上したと結論づけることができる。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

本研究科における研究活動の特徴は、その範囲が広いことにある。例えば、教員による研究業績種類の分布をみると、その内容が多岐にわたる（資料4-4；P4-5）。近年の傾向として、論文数の上昇が認められ、理系と同様、論文による研究成果の公表は文系分野においてもその重要性は増しており、また英語のみならずフランス語、ロシア語、イタリア語といった多様な言語でも学術論文が刊行されていることは、本研究科の強みであり特徴である。また、100を超える学術書・一般書が一貫して刊行されている。邦文以外の言語による研究業績は16～21%である。数だけに留まらず、人文社会系研究科における多様な専門分野はすでに文理融合として蓄積があり、海外のトップジャーナル（*Scientific Reports*, *PLoS*

東京大学文学部・人文社会系研究科

Biology, PLoS One, Nous, Synthese 等) への掲載も積極的である。このように、本研究科が対象とする研究分野の使用言語や執筆スタイルが一通りでないことが、研究にあたっての使用言語や公表媒体の多様性に繋がり、人文社会系研究におけるさらなる新たな展開を可能にしている。

さらに、本研究科の研究成果は、新たな分野の開拓という意味で、第1期よりも第2期では特に向上が認められる。デジタル・ヒューマニティーズといった文理融合型の新分野や、分野融合型、複数大学とのネットワークでつなぐ共同研究、など、新たに開拓された分野は第1期より増えた。

以上、これらの研究成果は、本研究科が目指す専門知の継承・伝承と新たな領域を開拓しつつ、広く一般社会に研究成果を還元することと整合的であり、第1期から第2期にかけて質の向上があったと結論づけることができる。